

# 中古和文における助動詞の相互承接について

小 田 勝

## The order of Auxiliaries in Classical Japanese

Masaru Oda

### 要 旨

「本を読まなかつたろう」は「\*読まなかつたろうない」とか「\*読まないだろうた」のようには決してならず、助動詞の承接順は一般に常に一定である。本稿は中古和文中の助動詞の相互承接順を調査し、以下の諸点を述べる。相互承接に両様あるものは6種あるが、その一方を標準的承接順とみなすことができる。中古和文の助動詞は、その承接順を一様に確定することができる。承接順は「接続句の制約からみた助動詞分類」の結果と一致する。

### Key words

助動詞 相互承接 中古和文

#### 0. 本稿の目的

日本語の助動詞は重ねて用いることができるが、その配列順は常に一定している。例えば、

(1) 本を読まなかつたろう。

では、「\*読んだらうない」とか「\*読まないだろうた」のように、決してならない。任意の2つの助動詞において、一般に、その先後関係は常に一定である<sup>(1)</sup>。橋本進吉は昭和6年度の講義「助動詞の研究」で、古代日本語の助動詞の相互承接順を調べ、もって助動詞の分類を試みた。

(2)はその講義録(橋本進吉1931)に挙げられた表である<sup>(2)</sup>。

(2)	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI
	す	る	たしぬ	たりつ	ず	べし	めり	けり	らし	らむ	けむ
	さす	らる	り			まじ	き	む	まし	じ	

ところでこの表には、次のような、いくつかの疑問が存する。

- i の順について、中古和文では通常「思ひ出でられさせ給ふに」(源氏物語・葵 43<sup>(3)</sup>)のように「(ら)れ さす」の語順で現れるが、「させ らる」の順はあるのか。
- ii 例えば、の「つ」との「めり」は、「もてなし給ふめりつるかな」(源氏物語・宿木 417)のような順の例がみえる。「めり」は(2)の の位置でよいのか。
- iii 「...とこそさしいらへまほしかりつれ」(源氏物語・藤裏葉 441)「遂げてまほしく思せど」(源氏物語・御法 511)のように、承接順に両様あるものの実態はどのようであるか。
- iv iiiのように承接順に両様あるものが存するとすれば、はたして助動詞の相互承接を、一定したものとして捉えることができるのだろうか。



例（調査資料中1例しか存しない承接例）である。

### 1.1 承接に両様存するもの

承接に両様存するのは、次の6種である。それぞれ、一方の承接順を標準とみなすことができる。

に たり（ぬ+たり）/たり ぬ（たり+ぬ）

『源氏物語』では「に たり」が183例存するのに対し、「たり ぬ」は、(3)のように、「たり」に「ぬべし」が承接した「たり ぬべし」が1例みられるのみである<sup>(7)</sup>。「に たり」の順が標準と認められる。

(3) かの家にも隠るへては据ゑたりぬべけれど、…（源氏物語・東屋 78）

まほしかり つ（まほし+つ）/て まほし（つ+まほし）

調査資料中、「まほしかり つ」は『源氏物語』に2例、「て まほし」は『源氏物語』に1例で、どちらも僅少例である。「まほしから ず」「ざり つ」の承接順から「まほし>ず>つ」<sup>(8)</sup>と考えられ、「まほし」が「つ」の上位に立つ「まほしかり つ」の順が標準と考えられる。

(4) 『河口の』とこそさしいらへまほしかりつれとのたまへば、…（源氏物語・藤裏葉 441）

(5) 昔よりの御本意も遂げてまほしく思せど、…（源氏物語・御法 511）<sup>(9)</sup>

ざる べし（ず+べし）/べから ず（べし+ず）

どちらもあり得る承接順であるが、『源氏物語』では「ざる べし」9例に対し、「べから ず」は(6)の1例で<sup>(10)</sup>、中古和文としては「ざる べし」が標準と認められる。

(6) 残りの命一二日をも惜しまずはあるべからず。（源氏物語・手習 285）

つ べし（つ+べし）/べかり つ（べし+つ）

『源氏物語』では「つ べし」が152例存するのに対し、「べかり つ」は(7)の1例でこれが調査資料中の唯一例である<sup>(11)</sup>。「つ べし」の承接順が標準と認められる。

(7) 今宵は月の宴あるべかりつるを（源氏物語・鈴虫 383）

つ めり（つ+めり）/めり つ（めり+つ）

調査資料中、「つ めり」は『落窪物語』に2例、「めり つ」は『源氏物語』に3例みえる。どちらも僅少例であるが、「つ べし」「べかん めり」の承接順から「つ>べし>めり」と考えられ、「つ」が「めり」の上位に立つ「つ めり」の順が標準と考えられる。

(8) 「末の松山」とこそ言ひつめれ。（落窪物語83）

(9) [桐壺更衣八]人げなき恥を隠しつつ、まじらひ給ふめりつるを（源氏物語・桐壺 31）

つ なり（つ+終止なり）/なり つ（終止なり+つ）

調査資料中、「つ なり」は『落窪物語』に1例、「なり つ」は3例（『源氏物語』『枕草子』『紫式部日記』に各1例<sup>(12)</sup>）存する。「なり つ」の方が多いたはいえるが、いずれも僅少例で、「つ べし」「べかん なり」の承接順から「つ>べし>終止なり」と考えられ、「つ」が「終止なり」の上位に立つ「つ なり」の順が標準と考えられる。

(10) 今様はことに文通はしせでも[結婚ヲ]しつなり。（落窪物語125）

(11) いとど愁ふなりつる雪かきたれいみじう降りけり。（源氏物語・未摘花 291）

## 1.2 孤例

表 に で示した承接は、調査資料中 1 例しかみられない承接例である<sup>(13)</sup>。以下に例をあげる。

【させ けむ ((さ)す+けむ)】<sup>(14)</sup>

(12) かづきするあまのすみかをそことだにゆめいふなとやめを食はせけん (枕草子125)

【たるらむ (たり+らむ)】

(13) 乱れ糸のつかさ一つになりてしもくることのなど絶えにたるらん (蜻蛉日記134)

【まほしから ず (まほし+ず)】<sup>(15)</sup>

(14) [筆策八] 轡虫などの心地して、うたてけぢかく聞かまほしからず。(枕草子251)

【ざる らむ (ず+らむ)】

(15) みまくさを燃やすばかりの春の日に夜殿さへなど残らざるらん (枕草子320)

【まじかり き (まじ+き)】

(16) 世の人のゆるし聞こゆまじかりしによりて、... (源氏物語・紅葉賀 328)

【まじから む (まじ+む)】

(17) およぶまじからむ際をだに、めでたしと思はん [女] を、死ぬばかりも思ひかかれかし。  
(枕草子276)<sup>(16)</sup>

【まじかり けむ (まじ+けむ)】

(18) 足づから行かずは、いますまじかりけん。(落窪物語99)

【べから まし (べし+まし)】

(19) この君達 (=夕霧) の、[我が娘ヲ] すこし人数に思しぬべからましかば、宮仕よりは、  
奉りてまし。(源氏物語・少女 66)<sup>(17)</sup>

【べかり けむ (べし+けむ)】

(20) [葵上八] いとあまり乱れたところなく、すすくしく、少しさかしとやいふべかりけむと思ふには頼もしく、見るにはわづらはしかりし人ざまになむ。(源氏物語・若菜下 209)  
「て まほし」(つ+まほし)の例は用例(5)、「べかり つ」(べし+つ)はの例用例(7)、「つなり」(つ+終止なり)の例は用例(10)にあげた。

## 1.3 存疑例・特殊例

表 に で示した、存疑例・特殊な承接例は次のようである。

【な ず (ぬ+ず)】【て ず (つ+ず)】

「な ず」「て ず」は極めて例外的な承接例で、調査資料中には存しない。古典文中には次のような例が存するとされる(いずれも反語の例で、結果的に事態は肯定される)<sup>(18)</sup>。

(21) 道知らで止みやはしなぬ相坂の関のあなたは海といふなり (後撰和歌集786)<sup>(19)</sup>

(22) かくながら散らで世をやはつくしてぬ花の常磐もありと見るべく(後撰和歌集・『新編国歌大観』・95)<sup>(20)</sup>

【まじかる べし (まじ+べし)】

『源氏物語』に 1 例、(23)のような「まじかる べし」の例がみえるが、不思議な例である。河内本の「まじき」を採るべきであろう。

(23) 人聞きもうたて思すまじかべきわざを、と [落葉宮八] おぼせば、その本意 (= 出家) のごともし給はず。(源氏物語・夕霧 464) 河内本は「おほすましき」。青表紙本系統の

池田本と三條西家本は「をすましかへき」

【べかり め(べし+ぬ)】

『和泉式部日記』に(24)のような例がみえる。単独の「べかり め」ではなく、「べし」に「ぬべし」の付いた「べかり めべし」の例であるが、変わった承接例であるといえる。

(24) 「…(歌)…」とこそ思ひ給ふべかりぬべけれ」と聞こえて(和泉式部日記404)<sup>(21)</sup>

なお、調査に使った『枕草子総索引』では、(25)の「なるべし」の「なり」を「終止なり」として、これを認めれば(25)が「終止なり+べし」の孤例となるが、この「なり」は連体形接続の断定の助動詞とすべきであろう<sup>(22)</sup>。

(25) 「御帳のうしろなるは誰ぞ」と問ひ給ふなるべし。(枕草子232)

#### 1.4 中古和文における助動詞の相互承接順の確定

以上より、中古和文における助動詞の承接順は、表 にみるように、(26)のようであると捉えることができる。

(26) る・らる > す・さす > め > たり・まほし > ず・まじ  
> つ > べし > めり・終止なり > き・まし・けり・む・らむ・けむ  
なお、の「たり」「まほし」、の「めり」「終止なり」、の「き」「まし」「けり」「む」「らむ」「けむ」は、それぞれ相互承接上同一視できる。

#### 2. 助動詞の相互承接順からみたヴォイス・アスペクト・テンス

以下、ヴォイス・テンス・アスペクトについて、この表 から指摘される諸点を述べる。

まず、ヴォイスについて。(26)にみるように、中古和文において、「(ら)る」と「(さ)す」は「られ さす」の順で現れる。調査資料中の「られ さす」は(27)~(29)の3例で、すべて「さす」が尊敬である(「(ら)る」は、(27)×(28)は受身、(29)は自発)。

(27) 人に知られさせ給はぬ御歩きはいと軽々しく、なめげなることもあるを…(源氏物語・浮舟 134)

(28) 故宮のはてまでそしられさせ給ひしも(和泉式部日記403)

(29) 若君(=夕霧)の御まみの美しさなどの、春宮にいみじう似奉り給へるを見奉り給ひても、[源氏八春宮ヲ]まづ恋しう思ひいでられさせ給ふに忍びがたくて、[宮中ニ]参り給はむとて…(源氏物語・葵 43)

すなわち、古代語では、現代語の「させられる」という「使役+受身」の表現がみられないといえることができる<sup>(23)</sup>。中世になると(30)×(31)のように「(さ)せ らる」という承接例がみえるはじめるが、これも「使役+尊敬」(用例(30))か、「尊敬+尊敬」(用例(31))であって、「使役+受身」というヴォイスの重複例ではない。

(30) 然ればこの御所をば清盛などに守護せさせらるべし。(保元物語・新編日本古典文学全集・265)

(31) 民部卿入道為家、判ぜさせられけるにも(増鏡334)

このように古代語にあっては、1文中にヴォイスが1つしか選択されない、といえるのであるが、この理由、また現代語で「(さ)せ られる」(使役+受身)という表現が存するようになった事情については、今のところ不明である。

表 から、テンス・アスペクトを表す助動詞の「む」「ず」との承接の可否は(32)のようにま

とめられる。

(32)		つ	ぬ	たり	き	けり
	「む」下接				x	x
	「ず」下接	x	x		x	x
	「ず」上接		x	x		

(32)からは次のような諸点が指摘される。

キ・ケリは未実現を表す「む」を下接できない。

ツ・ヌ・キ・ケリの表す事態は、取り消すことのできない現実性を有している。

打消された事態は又形・タリ形をもたない。

### 3. 接続句の制約からみた助動詞分類と助動詞の相互承接順

助動詞の承接順は文の階層性を反映したものと考えられ、文の階層性は接続句内の生起可能性で調べることができる<sup>(24)</sup>。すなわち、

(33) 本を読まなかったらう。( = ( 1 ) )

において、「本を読み つつ」といえるが、「\*本を読まない つつ」「\*本を読まなかった つつ」「\*本を読ませなかったらう つつ」とはいえない。「つつ」は「動詞+ヴォイス」の部分しか中に収めることができないのである。同様に、

(34) a 本を読ま { ない / \*なかった / \*なかったらう } と困る

b 本を読ま { ない / なかった / \*なかったらう } ので

c 本を読ま { ない / なかった / なかったらう } けれど

のように、仮定を表す「と」は「否定」部分まで、「ので」内は「否定+過去」部分まで、「けれど」内は「否定+過去+推量」部分までを中に収めることができる。筆者は先に、このような接続助詞との共起制限をもとに中古和文中の助動詞分類を試みた(小田勝(2006)第5章。以下「前稿」と呼ぶ)。その結果と、本稿の(26)に示した助動詞の承接順位とを比べると、(35)にみるように所々一致しない点がみられるが、接続助詞との共起制限による階層に若干の補正を加えると、両者は完全に一致することが示される((35)の「階層補正」で印が、後に述べる理由によって補正した箇所である)。

(35)	承接順位	階層	階層補正
(ら)る	1	1	1
(さ)す	2	1	1
ぬ	3	3	2
たり	4	3	2
まほし	4	2	2
ず・まじ	5	2	2
つ	6	3	2
べし	7	2	2
めり・終止なり	8	5	5
き・まし	9	4	5
けり	10	5	5
む・らむ・けむ	10	6	6

(35)にいう1～6の「階層」は、(36)のような接続句内の生起の可否で示される((36)はその接続句内に生起可、×は生起不可であることを示す。また「未ば」は未然形接続の「ば」、「已ば」は已然形接続の「ば」を示す。詳細は前稿参照)。

(36)	階層	つつ	て	とも	未ば	已ば	ど・ども
	1						
	2	×					
	3	×	×				
	4	×	×	×			
	5	×	×	×	×		
	6	×	×	×	×	×	

(35)にみるように、承接順位と助動詞の所属階層は一致しない部分が存するが、次の～の理由により、「ぬ」「たり」「つ」を階層2、「き」「まし」を階層5とすれば、両者は完全に一致したものとして示される。

「ぬ」は前稿で階層3(「て」内に生起できず、「とも」内に生起可)としたが、「に て」(ぬ+て)が中古和文10作品中30例存するので、「ぬ」は「て」内に生起可能な階層2と捉えられる。なお上代では「に つつ」の例がみえるので元来「ぬ」は「つつ」内に生起可能な階層1の助動詞だったと考えられる。

「たり」「つ」は「て」内に生起不可能なため階層3に分類されるが、「たり」「つ」が「て」に上接しないのは、階層の問題ではなく、「たり」「つ」の語源的な理由によるものとも思われる。

「き」は未然形接続の「ば」内に生起するので階層4とされるが、「せ ば」は過去の意ではなく、過去の意としては未然形接続の「ば」内に生起できない。「しか ば」「しか ど(も)」は可能なので、「き」は階層5に属するとも考えられる。「まし」も「ませば」は中古にほとんど例がなく(中古和文10作品中和歌の2例のみ)ほとんどの例は「ましかば」の形であって、これは形態上已然形接続の「ば」内に生起しているとも考えられる。

#### 4. 結 論

以上、本稿で得た結論は次のとおりである。

中古和文中の助動詞について、相互承接に両様あるものは、「ぬ+たり/たり+ぬ」「まほし+つ/つ+まほし」「ず+べし/べし+ず」「つ+べし/べし+つ」「つ+めり/めり+つ」「つ+終止なり/終止なり+つ」の6種であるが、それぞれ前者を標準的承接順とみなすことができる。

中古和文の助動詞は、その承接順を一様に確定することができる。中古和文の助動詞の承接順は次の通りである。

(ら)る>(さ)す>ぬ>たり・まほし>ず・まじ>つ>べし>めり・終止なり>  
き・まし・けり・む・らむ・けむ

の承接順は「接続句の制約からみた助動詞分類」の結果と一致する。

## 注

- (1) ただし「たらしい」「らしかつた」のように先後に両様みられる場合もある。
- (2) 3種の表があげられている内の乙表により、「しむ」などを一部略して示す。同種の承接表には、ほかに徳田淨(1936)による次のようなものがあり、
- 一位 す さす しむ  
 二位 る らる  
 三位 つ ぬ たり り べかり ざり たかり たがる  
 四位 けり めり ず  
 五位 き けむ らむ む じ まじ まほし まし べし らし たし (ごとし)  
 (下線を付した語は「同位又は上位語よりも上位に立ち得ることを示す」)
- ほかに、水野清(1966) 竹内美智子(1986)などがある。
- (3) 挙例は、『源氏物語』は新編日本古典文学全集(小学館刊)に、その他の作品は、特に断らない限り、日本古典文学大系(岩波書店刊)による。数字はその頁数(和歌集の場合は『新編国歌大観』番号)を示す。引用に当り表記は適宜改めた。
- (4) 調査には次の索引を用いた。『竹取物語総索引』(武蔵野書院刊) 『土佐日記本文及び索引』(白帝社刊) 『伊勢物語総索引』(明治書院刊) 『大和物語語彙索引』(笠間書院刊) 『かげろふ日記総索引』(風間書房刊) 『落窪物語総索引』(明治書院刊) 『枕草子総索引』(右文書院刊) 『CD ROM 角川古典大観 源氏物語』(角川書店刊) 『紫式部日記語彙用例総索引』(勉誠社刊) 『和泉式部日記総索引』(武蔵野書院刊)
- (5) ただし、体言(および活用語の連体形)に承接する「なり」(断定)は、他の助動詞と性格が異なるので、考察の対象外とした(これについては北原保雄1969参照)。また、「じ」は他の助動詞を一切下接しないので調査の対象外とし、「り」も承接が限られているので、同意の「たり」のみを調査することとした。
- (6) 表の「らる」には「る」を、「さす」には「す」を含む(本文中では「(ら)る」「(さ)す」と表記する)。「止なり」は「終止形接続の「なり」(本文中では「終止なり」と表記する)の意。
- (7) 「たりぬ」は他作品にも『蜻蛉日記』に「帰り来たりぬ」(314)の例が1例存するのみである。
- (8) 以下、「A > B」はAが承接上、Bの上位に立つことを示す。
- (9) 青表紙本系の池田本・肖柏本、河内本「とけまほしく」。
- (10) 『源氏物語』の用例(6)は僧都の詞。「べからず」は他作品では『竹取物語』に1例、『落窪物語』に4例、『枕草子』に1例みえる。
- (11) ただし「ぬべし」に「つ」が承接したもの、すなわち、「すこし隙ありぬべかりつる日ごろ」(源氏・少女 56)のような「ぬべかり つ」の例が、『源氏物語』に3例、『蜻蛉日記』に2例存する。用例(7)の「べかりつる」、『源氏物語大成 校異篇』によれば青表紙本・河内本に異文なし。
- (12) 『源氏物語』の用例(11)は確例であるが、他の2例は「なり」の上接語が終止形・連体形同形の次のものである。
- ・花盗人ありと言ふなりつるを(枕草子246)
  - ・「いづこより入り来つる」と問ふなりつるは、女御殿のと疑ひなく思ふなるべし。(紫式部日記482)
- (13) 調査資料中に用例が2例の承接例をあげる。
- ・[まほしかり つ(まほし+つ)] 例は本文用例(4)にあげた。
  - ・[まほしかり き(まほし+き)] 「一すぢにもつけけるかな」と言はまほしかりしか。(枕草子85)
  - ・[まほしかり けり(まほし+けり)] [柏木ガ] かかることをなむかすめしと申しいでて、[夕霧八源氏ノ] 御けしきも見まほしかりけり。(源氏物語・柏木 327)
  - ・[まほしから む(まほし+む)] すべて、心に知れらむことをも知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過ぐすべくなむあべかりける。(源氏物語・帚木 90)
  - ・[まじかり つ(まじ+つ)] 簾の隙より、なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うち垂れ髪の見えつるは、…(源氏物語・手習 308)
  - ・[つ めり(つ+めり)] 例は本文用例(8)にあげた。

・[べかる らむ(べし+らむ)] 露にのみいろもえぬればことのはをいくしほとかはしるべかるらん(蜻蛉日記281)

- (14) ただし、ほかに「深き山路を誰知らせけむ」(蜻蛉日記234)の例が1例ある。
- (15) 「したくない」という、打消された事態に対する願望表現は「未然形+まうし」「連用形+うし」の形が一般的である。  
 ・この君の御童姿、いと変へまうく思せど(源氏物語・桐壺 44)  
 ・[源氏八] 帰りうく思しやすらふ。(源氏物語・篝火 257)
- (16) 能因本にはこの段なし。
- (17) 『源氏物語大成 校異篇』によれば、下線部、青表紙本・河内本に異文なし。
- (18) なお、「な で」(ぬ+接続助詞「で」)は少数例存する。  
 ・潮に濡れたる衣をだに脱ぎかへなでなむ、こちまうで来つる。(竹取物語39)  
 「なず」「てず」については近藤明(1989)参照。
- (19) 新日本古典文学大系(岩波書店刊による)。
- (20) 新日本古典文学大系は「てむ」と校訂する。
- (21) 寛元本は「思ひ給へかへりぬべけれ」(講談社学術文庫『和泉式部日記』による)。
- (22) 一般に、活用語に承接した「なり」が、連体形で、かつ、下に助動詞を伴っているとき、その「なり」は断定の「なり」である(北原保雄1967参照)。なお、考察の対象とした助動詞ではないが、「終止なり」には、ほかに「その人のもとへいなむずなりとて」(伊勢物語168)という「むず+終止なり」という承接例がみえる。
- (23) このことは既に山田孝雄(1952)、竹内美智子(1986)などに指摘がある。
- (24) 南不二男(1974)、澤田治美(1983)参照。

## 引用文献

- 小田 勝(2006) 『古代語構文の研究』おうふう
- 北原 保雄(1967) 「「なり」の構造的意味」『国語学』68  
 (1969) 「中古助動詞の分類 文構造解明への一つの接近」『和光大学人文学部紀要』3
- 近藤 明(1989) 「助動詞ツ・ヌに否定辞が下接する場合」『国語学研究』29
- 澤田 治美(1983) 「S」システムと日本語助動詞の相互連結順序」『日本語学』2 12
- 竹内美智子(1986) 『平安時代和文の研究』明治書院
- 徳田 浄(1936) 『国語法査説』文学社
- 橋本 進吉(1931) 昭和6年度講義「助動詞の研究」『橋本進吉博士著作集 助詞助動詞の研究』岩波書店
- 水野 清(1966) 「助動詞の連接 文語におけるその変遷」『日本文学誌要』14
- 南 不二男(1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 山田 孝雄(1952) 『平安朝文法史』宝文館

